

# 世界陸上二〇〇七大阪



チェコのシェブレさんと撮ったこの記念写真は我が家の家宝である。

四年ほど前だったと思う。二〇〇七年に大阪で世界陸上が開催されることが決まり、これはどんなことがあっても見に行くことと決めていた。今年になってチケットが売り出されるとすぐ、棒高跳びと四百メートルリレーの決勝が行われる九月一日の夜の部をインターネットで早々に入手した。

長居陸上競技場に着いたのが、開場三十分以上前。すでに列が出来ていた。ペットボトルの持ち込みは禁止と聞いていたので、魔法瓶にお茶を入れて持っていったが、その中身を飲んでみて下さいと係の人が言う。なんと厳しいことか、昨今のテロ対策に世の中変わったと痛感した。

競技場に入る。席はスタンドの最前列で、棒高跳びのバーとクッションがすぐそこにあった。決勝に残った選手が練習をしていた。バーの高さは思っていたほど高くない。日が落ちて照明灯がつく。トラックで競技が始まった。目の前を走る選手に大きな声援がかかる。声援が選手と一緒にトラックを回る。

女子千六百メートルリレー予選が終了した頃、大会関係者がボランティアの若い人二人を連れてわれわれの席の近くにやってきた。

「Jー列の七番の方は？」

私ですと手を挙げると、「もうすぐ公式発表がありますが、あなたのチケットが当選し、今夜金メダリストと一緒に写真を撮れることになりました。十種競技の金メダリストとです」。十時頃また迎えに来ますからと彼らは去っていった。

四万人近くの人の中から一人だけ選ばれたのだから、これは奇蹟だ。おおやった、やったと、しばらく興奮が収まらなかつた。

十種競技はそれまで三位につけていたチェコのシェブルレ選手が、九番目のやり投げで七一メートルを超える大投擲で一位にたち、最終種目の千五百メートルで二位で追う選手をかわし金メダリストになった。

十種競技の勝者は、「アスリートの王」と呼ばれ、陸上競技の中でもっとも偉大な選手として崇められている。彼はアテネ五輪の金メダリストでもある。

十時過ぎ約束通り彼らがやってきた。私は妻と彼ら二人の後を付いていく。「これからVIPしか入れないところに行きますからこれを下げて下さい」と説明があり、もらったVIPパスを首から下げる。

ぐるぐる回って連れて行かれた所は、トラックの最終直線コースが目の高さより少し低くなっているあたりで、手を伸ばせば走る選手に触れられるほどの場所だった。

女子四百メートルリレーのジャマイカのアンカー、ベロニカ・キャンベル選手が先頭を行くアメリカ選手にもすごい加速で肉薄していくのを見ることが出来た。風が肉体を得て駆け抜けていくようだった。

十種競技の表彰式が済み、シエブルレさんが金メダルを首にかけて近づいてきた。国際陸連の人が、「この人たちが当選者です」とわれわれを紹介してくれる。考えていた挨拶（名誉であるとか云々）をしようと思った瞬間、かれが「ハロー」と言ったので、ああそうだ、簡単な挨拶が最初必要だと気づき、「はろー」と返事し、後は少しだけ話すことが出来た。

金メダリストを挟んで三人で写真を撮ってもらった。妻が日本語で「ありがとうございました」とお礼を言うと、シエブルレさんは「アリガトウ・ゴザイ・マス」といって、「ビューティフル」と付け加えた。

（二〇〇七年九月一四日）